九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

鄧梅羹『中国文学史綱』と譚丕模『中国文学史綱』：併せて新発見の劉復の佚序について

竹村，則行
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 ： 教授 ： 中国文学

https://doi.org/10.15017/13189

出版情報：中国文学論集. 36, pp.102-117, 2007-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

鄧梅羹『中国文学史綱』と譚丕模『中国文学史綱』
――併せて新発見の劉復の佚序について

竹村則行

はじめに

近代における中国人の『中国文学史』著作は、林伝甲『中国文学史』（一九〇四年）に始まるとされる。それは、当時東アジアを席捲していた所謂「西学」の東漸と歩調を合わせており、当初こそ明治維新によって先行した明治期日本人による『支那文学史』の影響を受けたものの[1]、間もなく辛亥革命や五四運動、新中国の成立を経て、近現代の中国文人による『中国文学史』が出現するのは理の当然であった。そして、その『中国文学史』著述の内容も、当初の総合的全般的な著述から、やがて分野別の専門的な内容に分化していくのは、近代における学問体系の進展の方向とも一致する必然の趨勢であった。

それらの近現代の『中国文学史』著作の書目（外国人著作、翻訳本を含む）を網羅した陳玉堂の『中国文学史書目提要』[2]は、通史編・断代史編・分類史編に分かって計三四五種の『中国文学史』著作の提要を載せるが、その十八年後に刊行された陳飛主編『中国文学専史書目提要』[3]では、作者文学史・読者文学史・主題文学史・体法文学史・民族文学史・地域文学史・比較文学史の七部門に分かって計七一〇種に倍増した書目を著録する。これらは書目の採録方針や範囲等によって増減を伴うであろうが、時代を経て蓄積を重ねた結果、『中国文学史』書目が増多するのはこれまた当然であろう。『中国文学史』史の研究者董乃斌は、二〇〇五年の論文「文学史：理論と実践の連動が必要である」[4]の中で、「現在までの所、我が国は既に一六〇〇余部の『中国文学史』を出版したが、佳作は少なく、

しかも現在なお毎年十余部のハイペースで出版されて」いると述べる。上記の二書目を比較すると、この二十年で飛躍的に増大した『中国文学史』分野は、民族文学史と地域文学史の分野である。これらは現代中国が抱える少数民族問題や地域文化の復興等の政治テーマに呼応したものと考えられるが、その内容の評価は今後の検証に委ねるとして、『中国文学史』著作の勃興自体は慶賀すべき現象であろう。

さて、それら許多の『中国文学史』著作の一に、鄧梅羹『中国文学史綱』（一九三二年初版）と譚丕模『中国文学史綱』（一九三三年初版）がある。後述するように、この二著は共に当時新興の思想であった唯物史観によって書かれた『中国文学史』著作である。譚著『中国文学史綱』は訂正版を重ねて今日も容易に版本を見ることができるのに対し、鄧著『中国文学史綱』は前記の二大書目にも一切載録が無く、そこに寄せた劉復（半農）序と共に、今日学界に忘却された『中国文学史』著作であるといえる。この二著が偶々同題の『中国文学史』であれば、紛らわしい同題別著の問題で済むのだが、実はこの二著は著者名を異にするにも関わらず、その内容は全く同一の同版であり、近現代の『中国文学史』著作史上、ひいては近現代の著作権の観点からも大きな問題と疑問が生じる。一体どのような経緯でこのような混乱が生じたのであろうか。拙稿は、鄧著に寄せた劉復序や当時の両著の出版社、鄧・譚両人の関係等、両著をめぐる当時の情況について可能な限り探索しつつ、一九三十年代初頭の『中国文学史』著作情況の一端について解明を試みるものである。

一　鄧梅羹と譚丕模の『中国文学史綱』

鄧梅羹（また譚丕模）の『中国文学史綱』[5]の本文は、以下の十六章に分けて叙述される。

第一　緒論
第二　原始封建制度時代の文学―西周（紀元前一二〇〇―八五〇）
第三　原始封建制度崩壊時代の文学（一）―春秋戦国（約紀元前八五〇―二五〇）
第四　原始封建制度崩壊時代の文学（二）―戦国（約紀元前三五〇―二五〇）

鄧梅羹『中国文学史綱』と譚丕模『中国文学史綱』

第五　封建制度復興時代の文学―両漢（約紀元前二〇〇―一五〇）
第六　封建制度破壊時代の文学―漢末魏晋南北朝（約一五〇―六〇〇）
第七　封建制度安定時代の文学―初唐（約六二〇―七二〇）
第八　封建制度危機時代の文学―中唐五代（七二〇―九七〇）
第九　封建制度表層安定時代の文学―北宋（約九七〇―一一〇〇）
第十　遊牧民族侵略下の文学―南宋（約一一〇〇―一二七〇）
第十一　遊牧民族統治下の文学―元代（約一二七〇―一三七〇）
第十二　新封建化時代の文学―明代（約一三七〇―一六〇〇）
第十三　封建制度復活時代の文学―清代（約一六五〇―一八五〇）
第十四　民族資産階級意識の萌芽時期の文学―清末（約一八五〇―一九一九）
第十五　封建時代の残滓と民族資産階級が混合統治する時代の文学―五四運動から一九二八年まで
第十六　労働大衆が覚醒する時期の文学―一九二八年から現在まで

以下、第一～二、七～八、十四～十六章の概要を紹介する。

第一章「緒論」は、更に一「中国文学史とは何か」、二「なぜ中国文学史を研究するのか」、三「どのように中国文学史を研究するのか」、四「中国文学史の発展段階」の四節に分かれる。この分問は、先行する謝无量、譚正璧、胡懐琛等の『中国文学史』、就中胡懐琛『中国文学史概要』（一九三一年）における「何謂文学、何謂中国文学史」の発問に啓発された可能性が高い。作者は、文学に社会経済生活の意識が反映されているとし、郭沫若の『中国古代社会研究』を引用しつつ、過去の中国文学史を認識することによって中国文学の将来を決定できるとする。また過去三十年[6]の『中国文学史』著作における時代区分、作家過信、白話偏重、文学分野逸脱の誤りを指摘し、該著が「新興の科学的方法―唯物論の弁証法」によって中国文学史を研究することを標榜する。

第二章は西周文学の叙述である。作者は西周時代に中国封建制度が始まり、貴族と農民階級が形成されたとする。そして貴族生活の反映として『詩経』「甫田」「楚茨」等詩、農民生活の反映として「七月」等詩を挙げる。

第七～八章は唐五代の文学史である。作者は、理由は明確でないが、七二〇（開元八）年以前を「初唐」、それ以後を「中唐」とし、通例の「初盛中晩」唐の四分に従わない。但し温庭筠・李商隠等に言及して「晩唐時代」という表現を用いる。作者の分析では、「初唐」は封建経済が安定した時代であり、この時代の文学家として王勃・楊炯・盧照鄰・駱賓王・沈佺期・宋之問の詩例を挙げる。また「中唐五代」を封建経済が破綻し、封建制度が危機に瀕した時代だとし、以下の四つの特徴と詩人、作品を挙げる。

①個人主義的感傷の表現（李白・李賀等）　②自然の闊達さを描いた作品（王維・孟浩然等）　③社会の混乱と人民の苦痛を描いた作品（杜甫・白居易等）　④内心の苦悶と生活の富裕を描いた作品（温庭筠・李商隠等）

またこの時代の特徴として、韓愈の古文運動や伝奇小説に言及する。

第十四～十六章は清末から作者執筆当時までの文学史である。

第十四章「民族資産階級意識の萌芽時期の文学」において、作者は清末を「国際資本主義の流入と封建経済の動揺」と捉え、「封建社会の残像を表現した」作家として黄遵憲、李宝嘉、呉沃堯、劉鶚、曾樸、更に翻訳文学者として林紓の名と作品を挙げて検討する。一方封建社会への未練を表現した文学の代表者は王闓運、鄭孝胥がいる。

第十五章「封建時代の残滓と民族資産階級が混合統治する時代の文学」では、陳独秀の「三大主義」、胡適の「八不主義」を引用し、次いで魯迅、周作人、葉紹鈞、郭沫若、郁達夫、張資平、徐志摩、謝冰心の人と文学について紹介する。中でも作者が多くの分量を割いて叙述する作家は魯迅、郭沫若、徐志摩である。

第十六章「労働大衆が覚醒する時期の文学」は、作者執筆直前数年間の文学情勢の分析である。一九二八年で改章する理由は不明だが、本章冒頭の記述によると、一九二九年の世界経済大恐慌や革命勢力の進展があるように思われる。ここで作者が分析する文学者は茅盾、田漢、丁玲、張天翼であり、特に茅盾については多くの頁を割く。

以上、鄧梅羹（また譚丕模）の『中国文学史綱』について、冒頭と末尾の数章だけであるが、内容紹介を試みた。作者が第一章「緒論」において述べるように、該著は当時新たに中国にもたらされた「唯物論的弁証法」によって、当時已に数編の先著があった『中国文学史』叙述を試みたものである。作者は同「緒論」において、

経済的変遷、是文学進展的動力、我們要把握着中国文学的史的演変的真面目、只有採用這一個唯物論的弁証法。

鄧梅羹『中国文学史綱』と譚丕模『中国文学史綱』

経済の変遷は文学進展の原動力であり、我々が中国文学の史的変遷の真実を把握しようとするなら、この唯物論的弁証法を採用するしかない。

と述べるのだが、分量の関係からか従来の王朝別『中国文学史』の体裁を払拭しきれていない恨みを筆者は感じる。

二　鄧梅羹と譚丕模について

わずか七十年程前の事でありながら、鄧梅羹については今日ほとんど知られていなく、筆者が把握した関連事跡は以下の微々たる数点に止まる。

①一九三十年代の初期、呂振羽の下で譚丕模らと共に中国共産党員として活動していたこと(7)。

②その著『中国文学史綱』に劉復が序を寄せていること（後述）。

③更に『資本主義与世界植民問題』（神州国光社、一九三二年）の著があること(8)。

一方、譚丕模については、履歴や著作等に関する情報が比較的豊富である。近刊の『文学史家譚丕模評伝』(9)によって、拙論に関わる事項を挙げれば次の通りである。

①本籍、生没年：湖南省祁陽県、一八九九―一九五八年。

②主要履歴：

一九二三―二八年（二十三―二十九歳）…北平高等師範学校―北京師範大学学生。―一九二九年（三十歳）…同年卒業、同郷の翟鳳鑾氏と結婚。―一九三六年（三十七歳）…湖南に帰郷し、抗日活動に参加。―一九三八年（三十九歳）…塘田戦時講学院教員。―一九三九年（四十歳）…淑浦民国大学教員。―一九四二年（四十三歳）…中山大学師範学院教授。―一九四五年（四十六歳）…桂林師範学院教授。―一九四九年（五十歳）…湖南大学教授。―一九五三年（五十四歳）…北京師範大学教授。―一九五八年（五十九歳）…十月、アフガン・アラブ連合共和国への中国文化代表団（団長は鄭振鐸）の一員としてモスクワ経由で赴く途中、飛行機事故で死去。

※この他、一九三十～四十年代に中国共産党員として日本軍や国民党に抗した多くの地下活動記録がある。

③主要著作（単著のみ。『文学史家譚不模評伝』「年表」による）…

『新興文学概論』（北平文化学社出版、一九三二年）・『文芸思潮之演進』（北平文化学社出版、一九三二年）

『中国文学史綱　古代―一九三二年』（北新書局、一九三三年）・『宋元明思想史綱』（開明書店・一九三六年）

『清代思想史綱』（開明書店・一九四〇年）・『汪精衛売国鼓詞』（淑浦通俗出版社、一九四〇年）

『中国文学史綱　第一分冊』（桂林文化供応社、一九四七年）・『中国文学史綱　上古―五代』（高教出版社、一九五四年）

『中国文学史綱　上冊』（人民文学出版社、一九五八年）・『古典文学論文集』（長江文芸出版社、一九五八年）

『中国文学思想史合璧』（遺著、北京師範大学出版社、一九九四年）

以上から、二十世紀の前半を生きた譚不模は、清末―民国―新中国の激動期にあって、日本軍の侵略に抗し、中国共産党員として、また北京師範大学等の教員として、唯物史観に立った『中国文学史綱』を始めとする文学史著作を次々に世に問うた、現代中国を代表する著名な文化人、教育者であることが明らかとなる。それにしても一九五八年の飛行機事故は団長の鄭振鐸（当時六十一歳）の遭難を含め、中国学術界の甚大な損失であった。

三　鄧序（劉復序）と譚序について

譚不模『中国文学史綱』（北新書局、一九三三年）には、一九三三年六月九日の日付がある次の作者自序を付する（常用漢字、日文式の表記で示す。番号は引用者）。

①這是我在北師教授中国文学史的講義、因為限于学校印刷的関係、写得非常簡単、所以命名為『中国文学史綱』。

②我是用新興社会科学的方法編這部講義的、僅花了八九個月的時光、自然免不了幼稚、這是要請読者教正的。

③因為我用的方法与過去一般編文学史者不同、市上所出版的中国文学史材料、大致不可用、只好向歴代文学家専集裡去找、以我毎週教課至十六小時和編講義至三門以上、対于一切専集、也只有走馬看花的渉猟一次過去、自然免不了有遺漏作者或作者的代表作、這也是要請読者教正的。

④第十二章以前的材料、有一部分是鳳鑾代找的。第十四章以後的材料很不夠、因為各大図書館没有新出版的書籍

鄧梅羹『中国文学史綱』と譚不模『中国文学史綱』

和雑誌出借、所以未了両章写得更没有系統、只好等将来有機会再説。

⑤自第一章至第四章的文中、所有「原始」字様、都是「初期」両字的錯誤、謹此声明。作者六、九、一九三三。

この自序の大要は次のようである。

①この本は北京師範大の中国文学史講義本であり、印刷の関係で簡単な叙述になったので『中国文学史綱』と命名した。②この本は新興の社会科学的方法（引用者注：唯物史観）によって八―九ヶ月で書いたが、幼稚部分の是正を読者にお願いする。③新しい手法のため、過去の中国文学史著が役に立たず、歴代文学家の専集を繙く必要があったが、毎週の講義準備に忙殺されて、それらの専集を簡単にしか渉猟していなく、作者や代表作の遺漏を免れないであろう。これも読者の教正を請う。④十二章以前の材料の一部は妻の翟鳳鑾が代わりに調べた。十四章（近現代）以後は資料が不足した。それは図書館の新本が貸出禁止であったためであり、末二章（十五―十六章）の叙述が体系化されていないが、将来の訂正の機会を待ちたい。⑤第一～四章における「原始」は全て「初期」の誤植であることを声明する。　作者、一九三三年六月九日

この自序からは、大学の中文講義テキストとして、三十年代初頭の北京師範大学において、校務多忙の時間を割いて図書館資料を渉猟する青年学者（及び翟夫人）の姿が彷彿する。この序は、周囲の事情の説明に終始し、著者として苦辛したはずの叙述内容の説明に踏み込んでいないもどかしさは残るが、僅か八九ヶ月で該著を完成したという旺盛な精力には驚く。また⑤節でことさら「原始」→「初期」字の訂正を明記した違和感が残る。

ところが、何とも奇妙なことに、譚丕模の『中国文学史綱』と全く同版の著作に、これまで中国文学史書目に一切載録されなかった鄧梅羹の『中国文学史綱』[10]が存在し、同著には、以下の劉復の「十一、一九三一、劉復」と明記する「劉先生序」を載せる。やや長文ながら、この序は今日学界への報告が無い劉復の佚文であると思われるので、①―⑦の番号を付して拙訳と共に紹介する（同じく常用漢字、日文式の表記で示す）。

①中国文学、具有悠久的歴史。作家之多、典籍之繁、真使我們忘洋興歎！要用史的眼光、把這故紙残篇、整理研究、写出一部有主旨和系統的中国文学史、当然不易。況且中国向来没有文学史的観念、所以旧著中、根本上

就没有所謂「文学史」、可以供我們借鑑的。（中国文学は悠久の歴史を持ち、作家や典籍の多さに茫然とする。史的眼光をもってこの反古紙を整理研究し、主題と体系を持った中国文学史を書こうとするのは容易ではない。まして中国には従来文学史の観念がなく、古典中に我々の拠るべき「文学史」が全くないのではなおさらである。）

②近三十年来雖有不少的中国文学史出版、大都是一些漫無系統的流水簿記而已！不但没有科学的方法、而且根本上缺乏歴史的眼光！所以上焉者、不過以朝代或個人為単位、呆板地作個別的演述、這不能不使我們歎息近来中国著作界的貧乏！（この三十年来多くの『中国文学史』が出版されたが、概ねは体系の無い出納簿である！科学的方法も無ければ歴史的眼光も全く無い！上出来とされる著作も、王朝や個人ごとに減り張りなく個々の叙述をしているだけであり、これでは我々は近来の中国著作界の貧弱さを嘆かざるを得ない！）

③一九三零年的冬天、吾友鄧梅羹先生把已捜集文学史的材料及編輯這部書的主旨、和我商議、我很同情他、并且鼓励他快点完成。到今年的冬天、梅羹持書稿請我訂正、我読完之後、非常満意、覚得在最近文学史上是一部「創作」！很楽意介紹這書的特点：（一九三〇年の冬、我が友鄧梅羹先生は収集した文学史資料とこの書の主旨を持って、私に相談に来たが、私は大いに共鳴し、彼に早く書物を完成するように激励した。今年（一九三一年）冬、梅羹が原稿を持参して来て私に訂正を求めたが、私は読了後、非常に満足し、これは最近の文学史上の「創作」（創意ある作品）であると感じた！そこで、喜んでこの書の特徴を紹介する。）

④第一、関於文学的本質：本書的取材、僅限於純文学範囲之内。把那些関於其他学科—政治、哲学、文字学…—領域内的材料、一概剔出。所以這是一部純粋的文学史、而不是那烏烟瘴気龐雑零乱的流水簿、或包羅万象的混合史。（第一、文学の本質について：本書は取材範囲を純文学に限定し、関連するその他の学科—政治、哲学、文字学等の領域内の材料を全て除く。そのためこの書は純粋の文学史となり、あの得体の知れぬ怪しげな出納簿や何でも詰め込んだ混合書の類の中国文学史書ではない。）

⑤第二、関於文学演変：従文学的下層構造—経済基礎的変動、社会制度的改革中、深深地把握[11]住中国文学之史的線索、開展的過程、作綜合的叙述。因為文学是社会意識形態之一、当然須従底裡着手、才能分晰出各時代文学嬗変的交光互影、及其暗遷黙移之迹、以説明中国文学史的真諦、使我們得到一個整個的史的観念。所以這不

鄧梅羹『中国文学史綱』と譚不模『中国文学史綱』

是断片地呆板地個別的演述、而是一部整個的文学史。（第二、文学の演変について：この書は文学の下層構造―経済基礎の変動や社会制度の改革の中に中国文学の史的端緒を深く把握し、中国文学の発展過程を総合的に叙述した。というのも、文学は社会の意識形態の一であるので、当然底辺の意識構造から着手して初めて各時代の文学変遷の綾模様や暗転の跡を分析し、中国文学史の実相を明らかにし、我々に完全な史観を与えることができる。そこでこの書は、断片的に減り張りなく個々の叙述をするのではなく、一冊の完全な中国文学史なのである。）

⑥第三、関於文学的産生和牠的特質：対於各朝代、各派別、各個人的文学之所以産生和牠的特質都有個正確的結論、並不只帰功於当代君主的提唱、某派作家的努力、某個作家的天才、因為単純的個人関係、並不能産生有価値的文学；而只認為是時代的反映、特殊環境的産児。這可以打破従来相信作家崇拝天才的謬見！這様才可以根本地推闡各階段文学的内相、説明牠的価値。（第三、文学の生産とその特質について：この書は各王朝、各派、各個人が文学作品を生産する所以とその特質について正確な結論を有しており、それを単に当代君主の提唱や某派作家の努力や某作家の天才の功績とはしていない。というのは単純な個人関係は価値ある文学作品を生産できず、時代相の反映や特殊環境の産物としか認められないからだ。このようにして、はじめて従来作家の天才崇拝の謬見を打破できるし、根本から各層における文学の内実を解明し、その特質を説明することが出来る。）

⑦以上数端、不過是略挙其犖犖大者；至於分時断代的審慎、観察的精細周密、引証的明確恰当、自有本書客観的答復、用不着我吹噓、這裡我只是把梅羹著作本書経過的一点事実写出来罷了。　十一、一九三二、劉復

（以上の数点は明白な特徴を挙げたに過ぎない。周到慎重な時代区分、緻密な洞察、的確な引証については、本書に客観的な回答があり、私が吹聴するまでもない。ここで私は、鄧梅羹の本書制作にかかる経緯の事実の一端を記したまでである。　一九三二年十一月　劉復）

以上の劉復の序から判明する鄧梅羹『中国文学史綱』の成書にかかる重要な事実は、上記③節に記される。そこで劉復は、鄧梅羹が『中国文学史綱』の資料と構想を持って劉復に相談に来たのが一九三〇年冬であること、その構想に共鳴した劉復は大いに成書を激励したこと、一年後の一九三一年冬に鄧梅羹が『中国文学史綱』の原稿を持って劉復に訂正を求めに来たこと、一読して非常に満足した劉復は喜んでこの序を認めたこと、等を明らかにする。

この著が一九三二四月に神州国光社から刊行されている（**後掲影印資料参照**）ことからすれば、間もなく原稿が出版社に渡され、約半年後に出版されたことになる。

以上は劉復の序文の全文である。その内容といい、措辞といい、まず間違いなく劉復本人の文章であると筆者は判断するが、管見の限り、この序文は劉復の文集等に収録されない佚文である。そこで次に、この序が書かれた一九三一年前後の劉復の事跡について検証することにする。

四　劉復（半農）について

劉復（一八九一―一九三四）、字は半農、江蘇省江陰の人。清末―民国期の詩人、作家、国語学者である。一九一七年、陳独秀の推薦で北京大学予科教員となる。一九二〇年、教育部派遣によりロンドン大学留学、翌年パリ大学へ留学し、博士号を取得する。一九二五年帰国、北京大学教授。一九三四年、中国西北方言調査中に伝染病に罹患して病没、四十四歳。学識の蓄積によって重さを増す青壮年学者の夭折が何とも惜しまれる。

略歴からも分かるように、劉復は清末中国に生まれ、ヨーロッパ留学を含み、青壮年期に辛亥革命、文学革命、五四運動、日中戦争を体験した当時の代表的な進歩派文人である。特にパリ大学留学時に修得した中国語音声学研究に特徴がある。主要著作に『中国文法通論』『四声実験録』『瓦斧集』『揚鞭集』『半農雑文』『宋元以来俗字譜』『中国俗曲総目稿』『敦煌掇瑣』等の学術書・詩文集のほかに、『香奩集』『西遊補』等の文学書の校点、『影印貫華堂原本水滸伝』序、『賽金花本事』（原纂）等の編纂、及び『国外民歌訳』『法国短編小説集』等の訳著多数がある。[12]

鄧梅羹『中国文学史綱』序に日付を明記する一九三一年十一月当時、北京大学教授である劉復は代表的な文人学者として活躍していたが、一方、当時を取り巻く政治情況として、二ヶ月前の九月十八日に満州事変が勃発し、日中戦争に突入した歴史も忘れてはならない。当時北京大学の同僚であった周作人（一八八五―一九六七）が親日的であったのとは対照的に、劉復はより中国人的な熱烈な愛国者であったとされる。なお、劉復（半農）の「友人」である魯迅は「劉半農君を追憶」する追悼文を残し、『魯迅日記』にもその名が頻出する。

鄧梅羹『中国文学史綱』と譚丕模『中国文学史綱』

その劉復が「一九三一年十一月」の日付で、当時無名であった鄧梅羹の『中国文学史綱』に序文を寄せたのは、上述の引用からも分かるように、その新興の科学方法（唯物史観）による中国文学史分析の新しい手法に感銘し（劉復自身の唯物史観への信頼はともかく）、その早期完成を祝しての激励の意を込めての事と思われる。

五　神州国光社と北新書局

ここでは、鄧梅羹と譚丕模の『中国文学史綱』を出版した神州国光社と北新書局について、一九三十年代初頭の情況を中心に概括しておくことにする。

神州国光社[13]は一九〇一年、黄賓虹・鄧実によって創立。社屋は始め上海河南路一三六号、後に福州路三七八号、間もなく福州路三八四弄四号に遷る。最初はコロ版による書画字帖金石印譜等を出版。黄賓虹主編『神州国光集』『神州大観』を出版、一九一一年に黄・鄧合編の『美術叢書』を発刊。後に経営の改善を図り、一九二八年に陳銘枢が会社を買い取り、黄居素・王礼錫の経営陣に移行、北京等の全国に分店を置いて業務内容を拡大する。この頃、美術書に加えて社会科学、文芸訳著の出版に重点を移し、『読書雑誌』『文化雑誌』等を刊行。一九三三年、陳銘枢が福建で抗日反蒋活動に参加した罪で、全国各地の分店が封鎖される。租界にあった上海本店は封鎖を免れたものの、経営続行が困難となり、新たに言行出版社を設立して『科学知識小叢書』等を刊行する。

以上の概略からも、「一九三二年四月出版、一九三三年十一月再版、神州国光社出版発行」の奥書**（付載影印参照）**を持つ鄧梅羹『中国文学史綱』は出版前後の情況が微妙である。即ち一九三三年の神州国光社封鎖事件と同年十一月の『中国文学史綱』再版の関係であるが、更なる具体的な把握が困難な今、これらの事実を記録するに止める。

また北新書局[14]は、一九二五年、魯迅の支持の下に、北京大学に学んだ李志雲、李小峰兄弟が設立。『苦悶の象徴』『吶喊』『中国小説史略』等の魯迅著訳書の多くや『語絲』『新潮』等の雑誌を出版したことで知られる。一九二七年、張作霖によって北京総局が封鎖されると、総局を上海宝山路、後に福州路三五三号に移す。一九三二年、林蘭（李小峰）の『小猪八戒』が回族の禁忌を犯したことを口実に、国民党によって営業停止を命じられる。

以上、概略ではあるが、一九三十年代初頭の中国（北京・上海）は、日本軍・国民党・共産党等の勢力が入り乱れる複雑な政治状況、及び出版情況であったことが露わとなる。

譚丕模『中国文学史綱』出版の奥書がある「一九三三年八月」における北新書局の情況がどうであったのか、上記の概略からは把握がなお困難であるが、神州国光社・北新書局ともに一九三十年代初頭、上海福州路に近接して総局を構えていたことは、両著の出版の経緯を究明しようとする拙稿においては看過できない重要な事実である。

まとめ

拙稿をまとめるに当たり、（一）劉復序と譚丕模序の信憑性、（二）鄧梅羹と譚丕模の一九三十年代初頭の関係、（三）神州国光社と北新書局の一九三十年代初頭の情況、（四）後発の譚丕模側の疑念の払拭について、の各項について改めて検討してみたい。

（一）劉復序と譚丕模序の信憑性

第三章に引用した鄧梅羹『中国文学史綱』に寄せた劉復序は、その後進研究者たる鄧梅羹との出会いと激励、新興の文学史観による鄧梅羹の労作に対する評価等の観点から、筆者は劉復の佚文であると判断する。この文が八十年近く劉復研究者の調査網から漏れた理由は、劉復の一九三四年四十四歳での夭折、事跡が皆無に近い鄧梅羹の発言による補強が困難であったこと、神州国光社の一九三三年の封鎖事件等の様々な要因が考えられるが、当事者や関係者の新証言が得られない今は、真相は残念ながら闇の中である。

一方の譚丕模序は、序文を撰したのは確かに本人であろうし、北京師範大の中国文学史講義資料の収集に夫婦共に奔走したのも事実と思われる。しかし、序末の「原始」→「初期」の修正は不自然であるし、また十八頁註八に、自分の論文を引用して「参見譚丕模的中国革命問題的認識」と記するのも、見方によっては違和感を免れない。仮に『中国文学史綱』を譚著とした場合、一九三三年六月の日付を有する譚丕模序が、前年に刊行されている同版の鄧梅羹『中国文学史綱』について全く言及しないのは、やはり不自然不可解である。

これを要するに、譚丕模序文は確かに本人の自序であろう。しかし『中国文学史綱』本文が前年刊行の鄧梅羹著の本文と同版であることの説明が後刊の譚丕模側に求められるにも関わらず、譚序にその説明は無い。

（二）鄧梅羹と譚丕模の一九三十年代初頭の関係

鄧梅羹に関しては、『中国文学史綱』を出版した一九三二年前後の伝記資料に乏しい。譚丕模については、『文学史家譚丕模評伝』によって、三一年九月十八日の満州事変勃発前後に抗日活動に身を投じたことが知られる。恐らく鄧梅羹も同様の愛国運動に邁進したと思われるが、今のところ、この二人を結びつける確かな伝記資料は得られていない。

（三）神州国光社と北新書局の一九三十年代初頭の情況

第五章に示した神州国光社と北新書局の略史から、『中国文学史綱』を出版した一九三十年代初頭、両出版社ともに上海の文化街福州路に近接して社屋を構えていたことが分かる。蒋介石や張作霖の封鎖事件が神州国光社や北新書局に与えた衝撃の大きさは甚大であったであろうが、譚側の盗版疑惑を含む『中国文学史綱』出版に絡む具体的な経緯について、筆者は残念ながらこれ以上具体的な実証資料を持たない。ただ軍閥の出版界介入が徹底的であり、当時出版社は未曾有の存亡の危機に陥ったであろう事を推測するのみである。

（四）後発の譚丕模側の疑念の払拭について

譚丕模は中国において最も早く歴史唯物主義の観点と方法によって中国文学史を研究した著名な文学史家であり、卓越した教育者である。[15] 唯物史観による分析を試みたその『中国文学史綱』は、著者自ら何度も校訂を重ね、[16] 現代中国におけるテーマ別の中国文学史著述として相当の高い評価を受けている。拙稿はそれらの赫赫たる業績と高い評価を認識するものであるが、特に一九三三年版『中国文学史綱』については、直前に鄧梅羹の同版著作の存在が明らかになった以上、何らかの説明を譚丕模側に求めたいが、既に七十年以上も前の旧事であり、外国の一研究者としてはこれ以上の探索が困難である。或いは無学の故の資料の見落としや誤解もあるであろう。よって、以上の調査結果を中日の学界に報告し、関係各位のご教示を待つものである。

注

（1）拙稿「明治日本の『支那文学史』と清末民初中国の『中国文学史』」（九州中国学会『九州中国学会報』四十四、二〇〇六年）、また「日中『中国文学史』の初期著作における「西学東漸」」（『南腔北調論集―中国文化の伝統と現代』、東方書店、二〇〇七年）参照。

（2）黄山書社、一九八六年。及びこの旧版と思われる『中国文学史旧版書目提要』（上海社会科学院文学研究所、刊年不詳）。

（3）大象出版社、二〇〇四年。この間に、黄文吉『台湾出版中国文学史書目提要』（万巻楼、一九九六年）があり、台湾出版の関連書目を幅広く網羅するが、付録「中国文学史総書目（一八八〇―一九九四）」には諸外国も含めて一六〇六種の書目を収録するという。なお、吉平平・黄暁静『中国文学史著版本概覧』（遼寧大学出版社、一九九二年）に収録する関連書目は五七八種である。

（4）董乃斌「文学史：需要理論与実践的互動」（『上海文化』二〇〇五年五期、総五二期、上海市作家協会・上海社会科学院文学研究所）。原文は「到目前為止、我国已出版一六〇〇余部中国文学史、但佳作寥寥、而目前還在以毎年十余部的高速産出、有的学者対此表示担憂。」

（5）鄧梅羹『中国文学史綱』と譚丕模『中国文学史綱』は、全くの同版である。両著の本文が同版である理由は、全書の印刷活字の濃淡、下記の同一誤植（カッコ内正字）に加え、**次図**に示す同一の不良活字使用等による。

稽康（嵇康、八五頁）、義鳥（義烏、一一七頁）、趙景琛（趙景深、一六九頁）、胡翼雲（胡雲翼、二〇七頁）、浙江（浙江、二七七、二九四頁）、寧海（海寧、三〇三頁）

次図

民族革命，辛亥革命	民族革命，辛亥革命

…（『中国文学史綱』二四一頁の排字例。上は鄧梅羹著、下は譚丕模著）

（6）一九〇四年の林伝甲『中国文学史』発表から『中国文学史綱』発表の一九三二年まで。

（7）初代学長である呂振羽について述べた大連理工大学のホームページによる。

（8）日本では大阪市立大学図書館所蔵、未見。なおこの他に『敵情研究』（鄧梅羹著、国民出版社、一九四〇）、『敵情研究』（鄧梅羹編輯、国民出版社、一九三九）の二点が吉林省図書館のホームページで検索できるが、本稿と同一人物鄧梅羹『中国文学史綱』と譚丕模『中国文学史綱』

か不明。

（9）張谷・譚得伶（譚丕模女、北京師範大学教授）編、北京師範大学出版社、二〇〇五年。なおこの本に鄧梅羹への言及は無い。

（10）架蔵本は「一九三二年四月出版、一九三三年十一月再版、神州国光社刊」本（**後掲の影印資料参照**）。該書は日本または中国の古書店で購入したはずだが、定かな記憶も記録も筆者にはない。

（11）「把握」、原文は「把提」に誤る。

（12）資料集に『劉半農研究資料』（鮑晶編、天津人民出版社、一九八五年）、評伝に『劉半農伝』（朱洪著、東方出版社、二〇〇七年）がある。これらの著書に、劉半農の鄧梅羹『中国文学史綱』序文の記録、言及は無い。

（13）『上海出版志』（同編纂委員会、上海社会科学院出版社、二〇〇〇年）による。

（14）前注『上海出版志』のほか、『中国出版志』（吉少甫主編、学林出版社、一九九一年）を参照。

（15）『文学史家譚丕模評伝』冒頭の肖像紹介文より引用。

（16）同『文学史家譚丕模評伝』二六九頁によると、一九四七年版『中国文学史綱』（第一分冊）序言において、既に「前後凡そ六度稿を易えた」ことを述懐する。

（※）本論文は、第二二五回中国文藝座談会（九州大学中国文学会、二〇〇六年九月九日）において、筆者が「別人同版の中国文学史著作――鄧梅羹と譚丕模の『中国文学史綱』をめぐって――」と題して口頭発表した原稿を、新たに論文に書き直したものである。

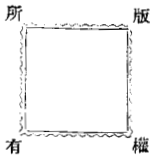
（※）本論文は、日本学術振興会科学研究費（基盤研究C、平成十七―十九年度、課題番号一七五二〇二三四）による研究成果の一部である。

（鄧梅羹著『中国文学史綱』の奥書き）

一九三二年四月出版
一九三三年十一月再版

中國文學史綱 全一册

實價大洋捌角



編著者 鄧梅羹
訂正者 劉復
出版者 神州國光社
發行者 神州國光社
代售處 各省市大書局

（譚丕模著『中国文学史綱』の奥書き）

一九三三年八月出版

中國文學史綱（全一冊）

實價大洋捌角

編著者 譚丕模
印刷者 和濟印書局
發行者 北新書局